

## 罪の告白

ロバート・D・ルギンビル博士著

<https://ichthys.com/Pet15.htm>

**霊的成長の復習：**信者の成長パターンに関するこれまでの研究で述べてきたように、霊的成長のプロセスは段階的なものであり、最大の効果を得るためには次のことが必要です：

- 神の御言葉を探求し求めること(聞く段階)。
- 神の真理を信じること(信じる段階)。
- その真理によって自分の人生を生きる(生きる段階)。
- 私たちの霊的賜物によって、他の人々が同じことをするのを助ける(助ける段階)。

これまでの研究では、聖書の真理を求めることによって霊的成長を開始する、プロセスの第一段階である「聞く」段階と、受け取った真理の原則を信仰によって心に受け入れることに重点を置く第二段階である「信じる」段階について考察してきました。

次は、霊的成長のプロセスの第三段階と第四段階である「生きる」と「助ける」です。私たちが学んだように、私たちも生きるべきです。また、霊的成長を求めて神の恵みの恩恵を受けたように、同じ目標を追い求める人々に手を貸すべきです。私たちが受け取った真理は、私たちの中に眠っているべきではありません。それどころか、私たちはそれによって活力を与えられ、やる気を起こさなければなりません。私たちは学び、信じた情報を、私たちの人生、私たちの考え、そして私たちの人生を形づくるために用いなければなりません。

**ライフラインの維持：**何よりもまず、良いクリスチャン生活を送ることも、神が望んでおられるように神に仕えることも、「神を知ることによって成長する」([コロサイ1章10節](#))という私たちが確立したパターンを維持することが必要です。結局のところ、神の御言葉は私たちの霊的な食べ物であり、それを見過ごすことは、肉体的な食べ物をないが

しろにするのと同じように、私たちの心にも悪影響を及ぼすのです(1 [ペテロ 2 章 2 節](#); [第一コリント 3 章 2 節](#); [へブル 5 章 12-14 節](#)参照)。

**御言葉を生きる：**神の御言葉を聞くだけでは十分ではありません。私たちは、聞いたことを信じなければなりません。そして、もし私たちが神の御言葉を本当に信じるなら、その言葉は私たちの考えや行動、そして私たちの生き方に力強い影響を及ぼさずにはいられないでしょう。イエスは「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう」([マタイ 7 章 24 節](#))と言われ、ヤコブが「御言を行う人になりなさい。おのれを欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけない」([ヤコブ 1 章 22 節](#))と言いました。これらの聖句はどちらも、人が神の御言葉の真理を信じるなら、そしてその信仰が本物であるなら、その信仰を実践することによって、その信仰は必然的に行動を伴わなければならないということとを当然のこととして捉えています。聞くことからクリスチャン生活を行うこと(生きること)へと直接的に移行しているのです。ヤコブの言う「きよい宗教」とは、信じたことに基づいて実際に生きることを要求するものです([ヤコブ 1 章 27 節](#))。

**霊的なフィットネス：**適切な栄養摂取と適切な運動が組み合わされなければ良い体調にならないのと同じように、神の御言葉を聞き、それを信じていると主張するだけでは十分ではありません。良い「霊的な体づくり」をするためには、身につけた聖書の知識を日常生活に一貫して適用することが必要です。信じている真理に従って生活することは、私たちの信仰に筋肉をつけ、神が望んでおられるような人間に私たちを変え始める、不可欠な霊的運動なのです。パウロが[第一テモテ 4 章 7-8 節](#)で言っているように、「信心<新改訳IV:敬虔>のために自分を訓練しなさい」。私たちが信じる原則に従って信仰を実践する習慣を身につけなければ、私たちが求める敬虔さに達成することは不可能であり、霊的に弱くなり、霊的な健康を損なう危険性があります。

**競争を走る：**[1 コリント 9 章 24-27 節](#)で、パウロは私たちが信じていることを実際の経験に適用するこの日々のプロセスを、レースを走ること例えています([使徒行伝 20 章 24 節](#); [ガラテヤ 2 章 2 節](#), [5 章 7 節](#); [ピリピ 3 章 12-16 節](#); [コロサイ 2 章 18 節](#); [第二テモテ 2 章 5 節](#), [4 章 7-8 節](#); [へブル 12 章 1 節](#), [12 章 12-13 節](#); [第二ヨハネ 1 章 9 節](#)参照)。「勝つ走りをしなさい！」と彼は私たちに勧めています。好むと好まざるとにかかわらず、私たちは皆、この地上でのクリスチャンとしての人生のレースに参加しているのです。そして、このレースに「勝利」するためには、昔の選手たちが勝利の花輪を得るためにしたように、私たちも「あらゆることについて自制し」<新改訳III>なければなりません([第一コリント 9 章 25 節](#))。

これは簡単に言えば、神から与えられた人生で勝利を得るためには、一貫して行わなければならないことと、断固として避けなければならないことがあるということです。多くのスポーツ競技がそうであるように、クリスチャン生活を送る上でも、勝つためには「良いディフェンス」と「良いオフェンス」が必要なのです。ですから、霊的な成長に必要な、また霊的な成長に関連するすべての肯定的な事柄の議論に進む前に、まず個人的な罪の問題と、それにどう対処するかを考えるべきです。

**罪の問題：**私たちの心の真の変化のプロセスでさえ、決して「罪のない完全さ」を生み出すことはないということに、私たちはすぐに気づく必要があります。私たちの主は人生のあらゆる誘惑に誤りなく立ち向かわれましたが（[ヘブル 4 章 15 節](#)）、私たちは、必然的にその足元にも及びません（[ローマ 3 章 23 節](#)）。それは、私たちの肉体そのものが墮落している、つまり罪に「内在」されているからです（[ローマ 7 章 20 節](#)、[創世記 6 章 5 節](#)、[8 章 21 節](#)）。ですから、自分のために罪を「再定義」という間違いを犯してはなりません。罪とは、私たちが個人的に不快に思うことだけではなく、むしろ神が禁じておられるすべてのことなのです。私たちは、神の禁止リストに付け加えることも、そこから差し引くこともできません。神にとって、すべての罪は神の御心に背くことだからです。アダムとエバは禁断の実を食べたために楽園から追放されましたが、その行為自体は特に不道徳とは思えませんが、神の権威を明らかに、故意に拒否した行為でした（[創世記 2 章 16-17 節](#)）。神によって禁止された行為は、たとえ私たちにはひどく間違っているように思えなくても、私たちに衝撃を与え、個人的に怒らせる行為と同じように罪深いのです。

**罪なき完璧さという神話：**「わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者となるべきである」（これが私たちが保つべき基準です：[第一ペテロ 1 章 15-16 節](#)）、霊的に成長するにつれて向上することが期待されている（これが私たちが目指すべき目標です：[ヘブル 5 章 11-14 節](#)）にもかかわらず、この腐敗した肉体と腐敗した世界では、絶対的な罪の無い状態は達成不可能です。「罪のない完全さ」は誤った教義であり、それが生み出す大きな心理的重圧のために危険なものなのです。罪の現実性と必然性から、このような見解の信奉者はしばしば、ある種の罪が本当に罪であることを否定したり、ある種の罪を（犯すことはあっても）犯していることを否定したりします。しかし、罪の範囲は非常に広く、陰湿であるため、人間の心の動機と表現そのものを包含しています（[エレミヤ 17 章 9 節](#)；[ガラテヤ 5 章 19-21 節](#)；[エペソ 4 章 29-31 節](#)；[ピリピ 2 章 3-8 節](#)）。自分自身の義を証明するために、どのような完全性の基準を選んでも、私たちは必ず失敗します（[ローマ 9 章 31 節](#)、[10 章 3 節](#)参照）。十戒は、神によって定められた人間の行いの最も具体的な基準であり、私たちの心の欲望を、偶像礼拝や殺人と同じように、全く罪深いものだと宣告することで締めくくられています（「欲しては

ならない」：[出エジプト記 20 章 17 節](#), [ローマ 7 章 7-12 節](#)参照)。そして実際、パウロは、神が律法をお与えになった目的は、私たちがみな罪深い者であり、それゆえに罪の問題に対する神の解決策であるイエス・キリストを必要としていることを、疑いなく全人類に証明するためであったと教えています([ローマ 3 章 9-20 節](#); [ガラテヤ 3 章 19-25 節](#))。パウロの時代の「宗教的」な人々の多くは、自分の義を証明する基準としてモーセの律法を用いようとしていましたが、そうすることによって自分自身を罪に定めることにしかありませんでした([ローマ 3 章 20 節](#))。真の義とは、御子を信じるときに神から与えられるものだけです([ローマ 4 章 5 節](#))。悪魔に支配された敵対的な世界でイエスに従う者として、私たちは自分の個人的な欠点、誤り、罪について幻想を抱いている余裕はありません。私たちは、それらをありのままに認識し、それらに対処するために神が与えてくださった恵みを直ちに活用しなければなりません。

**罪からの清め：**すなわち、キリストの御業によって赦され、聖なるものとされたのです([エペソ 2 章 5-9 節](#))。しかし、「キリストにあって」([第一コリント 6 章 11 節](#)) 私たちは清く純粋ですが、悪魔の世を歩く私たちの足には、まだ汚れてしまう可能性があります。神は私たちに「聖なる民」という地位を与えてくださいましたが、私たちはまだ不完全であり、罪を犯す可能性があります。ですから、私たちはこの地上に滞在する限り、常に個人的な罪を犯しやすいという事実には注意し、「容易にからみつ়罪」([ヘブル 12 章 1 節](#))に巻き込まれたときにはいつでも、それを告白する用意ができていなければなりません。これは、イエスが最後の晩餐の前に弟子たちの足を洗われたときに言われたことです([ヨハネ 13 章 1-17 節](#))。ペテロは、イエスが他の弟子たちとともに自分の足を洗ってくださるのを嫌がりました。しかし、イエスが、足を洗ってもらわなければ、ペテロはイエスと「なんの係りもなくなる」と言われたとき、ペテロは、主に自分の体も洗ってくださるよう求めました。イエスは、「すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなのだから」([ヨハネ 13 章 10 節](#))と言われました。

主は私たちに、アダム以来全人類を責め苦しめてきた罪の束縛からの解放がただ一つ必要であること、そしてこの解放、すなわち「贖い」は、主が私たちの身代わりとなって死なれ、私たちが主を信じる信仰によって与えられるものであることを語られたのです([コロサイ 2 章 13-14 節](#))。この「贖い」こそが、罪からの「洗われること」、すなわち清めであり、それはすでに成し遂げられたことであり、二度と繰り返す必要はありません。しかし、私たちは信仰者として個人的な罪を犯し続けることがあり、そのようなときには「足を洗う」、つまり、神に罪を告白するときにもたらされる赦しと回復が必要です。私たちは一度だけ罪から洗われる<キリストによる罪の贖いによる洗いの>必要があります。罪を犯すたびに、罪を清める<告白は罪を犯すたびに>必要があるので

**罪に関するヨハネの入門書：**上記の理由から、罪は非常に個人的な問題であり、非常に厄介な問題です。使徒ヨハネは、民族的にも地理的にも多様でありながら、長年にわたって使徒的な教えの恩恵を受けてきた信徒たちに手紙を書きましたが、私たちがヨハネ第一の手紙として知っている手紙の中で、罪の問題を詳しく検討する必要を感じていました。1章5節から10節まで、ヨハネは罪の教理を簡潔にまとめています：

5節: わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。

この節は、神は罪とは何の関係もないという原則を強調して述べています。神は罪の創始者ではなく、罪に対して何の責任も負いません。罪を容認することはありません。罪は神とは異質なものであり、神と相反するものです。ですから、もし私たちが神に属するのであれば、罪は私たちとも関わりを持ち得ないのです。

6節: 神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っていない。

神と罪は不倶戴天の対立関係にあるため、私たちは神に従うか、罪に従うかを選択しなければなりません。罪という闇の道を歩みながら、同時に神との関係(交わり)を持つことはできません。罪の暗い力の下に生きながら、神との関係を楽しんでいると主張するなら、私たちは自分自身を欺いているだけであり、神を嘘つきにしているだけです。神は罪を受け入れることはできないと言っておられるからです。神の恵みの力と素晴らしさがなければ、正直な心で自分自身と自分の人生を見ている人にとって、この二つの節は恐ろしいものでしょう。弟子たちの言葉が頭に浮かびます：「では、だれが救われることができるのだろう」([マタイ 19章 25節](#))。

7節: しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、**すべての罪**からわたしたちをきよめるのである。

定冠詞を伴わないギリシャ語のパス(πᾶς「すべての」)という言葉の使用は、ヨハネがここで個人的な罪の**すべての**行為に言及していることを示唆しています。この世で神に背く道を選んだ者にとっては、罪から逃れることはできず、神の聖なる民との交わりもありません。しかし、光の中を歩むことを選び、キリストに従う者には、神は罪のあらゆる側面からきよめる手段を備えておられます：神の御子イエス・キリストの十字架上で

の(聖書でしばしば「主の血」について述べている:[マタイ 26 章 28 節](#)参照)御業です。イエス・キリストが私たちの身代わりとなって死んでくださったことのゆえに、御父は私たちに代わってイエス・キリストの業を受け入れ、私たちのすべての罪を赦し、私たちがこの地上の肉体にとどまっている罪深い性質にもかかわらず、また私たちが個人的に犯し続けている罪にもかかわらず、私たちが清いとみなすことを正当化されるのです。例えて言うなら、父なる神は、私たちが汚す罪を覆う代わりに、私たちに「振りかけられた」([ヘブル 10 章 22 節](#)参照)「キリストの血」を見ておられるのです。父は、罪に対する死刑が私たちに代わって支払われたことに満足します。主は、私たちの必然的な罪に染まった実情によって私たちが裁くのではなく、御子との関係によって私たちが罪のない者とみなしてくださるのです。しかし、[7 節](#)では、正しい方法でクリスチャン生活を送ろうとしている(「光の中を歩んでいる」)クリスチャンは、クリスチャンの歩みの一部として罪からのきよめを必要としていることに注意してください。

**8 節:もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにはない。**

8 節は、自分を罪人だと思いたくない信者に対する重要な警告です。もし私たちが最近罪を犯していることに気づいていないとしたら、それは罪の広範で陰湿な性質についてはっきり理解していないからでしょう。この聖句は非常に明確です。信者として、私たちはまだ罪を犯します。罪を犯してはならないと命じられているのは事実です。罪を抑えることが霊的成長、さらには霊的安全のために必要であることは事実です。しかし、不完全な肉体を持ち、悪魔の世界にいる限り、私たちは罪との闘いを続けなければなりません。8 節は、罪に抵抗する私たちを落胆させるためでも、私たちに罪を犯すことを励ますためでもなく、むしろ、私たちが置かれている状況の冷たく厳しい現実には注意を促し、正しい聖書的な方法、すなわち告白を通して個人の罪に対処する必要性に目覚めさせるために書かれています。

**9 節:もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。**

9 節は、神が私たちの個人的な罪を赦してくださることは、神の忠実さ(神は約束を破らない)と正しさ(私たちに代わってキリストが前払いしてくださったから)の両方と一致していることを意味します。私たちが父なる神に祈りながら罪を告白するとき、神は私たちが赦し、ご自身と御子との完全な交わりを回復して下さいます。

10 節:もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにはない。

罪の告白は、クリスチャンの日々の歩みに欠かせないものです。定期的な自己吟味と組み合わせれば、個人の罪を聖書的に理解することは、平均的なクリスチャンが告白するための十分な材料となるはずで、す。「罪がない」という主張は誤りであり、クリスチャンの霊的健康にとって極めて有害です ([第一コリント 11 章 28-32 節](#))。

**罪の告白:** 信仰者として私たちが罪から完全に「清められている」のは、キリストとの関係から見た時だけです。キリストにある私たちの「立場」によって、父なる神は私たちが過去、現在、未来の罪から完全に洗われたと見なされます。いわば、私たちは「内側はきれい」なのです。しかし、日常の経験では、私たちはしばしば「外側が汚れる」のです。私たちは間違いを犯したからといってクリスチャンでなくなるわけではありません。私たちが過ちを犯したとき、改めて「救いのお風呂」に入る必要はなく、私たちが犯した個人的な罪の結果として「足」だけを洗う必要があるのです。

告白は、この継続的な問題に対して神が用意された解決策です。キリストの御業は、私たちがキリストを信じた時点 (バプテスマという儀式的な清めに代表されるように) で、私たちすべてを罪から解放するのに十分であるのと同様に、キリストの同じ御業は、救いの時点以降、私たちが罪を犯すたびに、私たちを清く洗うのにも十分なのです。

ダビデの偉大な告白の詩篇である詩篇 32 篇は、私たちが個人的な罪という厄介な問題に直面するとき心に留めておくべき二つの最も重要な原則をはっきりと示しているという点で、告白の仕組みの模範となっています。一方では、罪は重大な結果を伴う重大な事であることを自覚して自分の過ちを認め、心から悔いる態度で神に赦しを求めなければなりません。なぜなら、神の赦しは私たち個人の功績に基づくものではなく、御子イエス・キリストの御業に基づくものだからです。キリスト教の真理を適用する際によくあることですが、私たちはどちらか一方の極端さを避けなければなりません。私たちは、過剰な罪悪感や、神の完全で愛に満ちた赦しに対する不確かさに屈するわけにはいきません。

ダビデの経験は、この二つの原則を明確に示しています。神から罪を隠そうとしたとき、ダビデは神の厳しい懲らしめを受けました ([詩篇 32 篇 3-4 節](#))。しかし、彼がその罪を「知らせ」、認め、「隠すのをやめ、告白した」とき、神は彼を赦されました ([5 節](#))。認めること、隠すことをやめること、告白することは、告白の別々の「段階」ではなく、自分の罪を認めるという同じプロセスの異なる側面なのです。つまり、私たちは祈りの中

でそのことを神に告げ(6節参照)、自分の罪を否定することから抜け出し、自分の罪の事実を認める必要があるということです。そうすれば、神がダビデにしてくださったように、私たちが赦してくださることを確信をもって期待することができます(第一ヨハネ1章9節参照)。箴言28章13節にあるように、「その罪を隠す者は栄えることがない、言い表わしてこれを離れる者は、あわれみをうける」のです(詩篇51篇もお読みください)。次回は、罪からの回復という「デフェンス(防御的態度)」の問題から、「徳の思考」という「オフENSE(積極的態度)」の原則へと進みながら、霊的生活について学んでいきます。

<http://ichthys.com>